

東京を歩く

—地下鉄銀座線沿線のフィールドトリップ,

平成14(2002)年度「地理学臨地実習」「地域環境学臨地実習」の覚え書き—

香川 貴志

(京都教育大学)

Walking around Tokyo: A Memorandum of Field Trip along the Subway "Ginza-Line"

Takashi KAGAWA

2002年11月30日受理

抄録: 本論文は、平成14(2002)年度「地理学臨地実習」および「地域環境学臨地実習」の実施記録であり、同様のフィールドトリップを行う際の参考に資することを目的としている。コースの立案、シラバス作成、事前学習、現地実習、レポート内容の検討など、上記科目に関する情報が、本論文には幅広く編み込まれている。

キーワード: フィールドトリップ, 地域調査, 東京, 地下鉄銀座線

I はじめに—「地理学臨地実習」「地域環境学臨地実習」の目指すもの—

地理学や地域経済学など、特定の地域や空間を対象とする学問分野では、文献収集やその精読、あるいは統計処理などのデスクワークだけでなく、調査対象地域におけるフィールドワークが重要視される。デスクワークだけでは知り得ない「地域の匂い」が、フィールドワークでは体験となって身に付き、論文やレポートをまとめる際に大きな力となる。

一方、情報化が進んだ昨今の状況の下、地域調査(あるいは調査には及ばない地域観察)すらしないで、特定地域を対象とした研究をする者が増えつつあるように思えてならない。整った統計を整ったソフトウェアで加工すれば、ある程度の経験で美しい地図やグラフをともなった、スタイリッシュな研究を行うことも可能である。しかし、こうした研究は地域調査の経験を踏まえた者が行わなければ相当に危険である。多少の地域調査の経験がある者であれば、おそらく誰もが知っていることであろうが、フィールドに出れば何がしかの新たな発見が毎回得られるもので、フィールドに出ないことは何かを見逃すことに他ならない。

このようなフィールドを何らかの形で体験させるために、京都教育大学では社会科学科の専門科目に「地理学臨地実習」と「地誌学臨地実習」、環境学コースの地域環境学専攻の専門科目に「地域環境学臨地実習」が設置されている。これらの3科目はそれぞれ別の教官が担当していたが、学内事情により「地域環境学臨地実習」は、ここ数年「地理学臨地実習」との共通開講となっている。成績評価は個別に行うのが基本であるが、事前学習、現地での行動は共通で実施している(以下の本稿では、両科目を総称して「臨地実習」と記す)。

なお「臨地実習」という呼称はそれほど一般的ではなく、他大学の地理学関係の専攻で開設されている同様の科目は「野外実習」と呼ばれることが多いようである。いずれにせよ、その内容は、教官(教員)の指導の下に、野外観察や野外調査を行うものである。当然ながら、野外での指導だけでなく、事前に文献講読や統計処理などの事前学習が実施される。

「臨地実習」あるいは「野外実習」の方法は大別して2つある。一つは特定地域で詳しい現地調査を実施するインテンシブ調査、もう一つは移動しながら連続した地域を観察するエクステンシブ調査である。前後者ともにメリットとデメリットがある。インテンシブ調査は、地域調査の神髄に迫ることができ、調査能力の育成に優れているが、参加者には地域調査の基本的な知識や経験が求められる。したがって、インテンシブ調査は、地理学や地域経済学などを専門とする学生に適している。エクステンシブ調査は、ある程度広い視点で地域の連続性や諸環境の漸移を体験できる一方、調査能力そのものの育成には効果が少なく、どちらかといえば地域調査よりも地

域観察に力点を置いたものといえよう。したがって、エクステンシブ調査は、学生の専門分野にとらわれずに、入門的な地域調査を指向する場合、あるいは地域調査の楽しさや発見の喜びを体験させるのに適しているといえる。

京都教育大学では、上記の「臨地実習」3科目を登録する学生の専門分野が多岐にわたっているのが通常である。そのため、水準の高いインテンシブ調査は実施しにくい状況にあり、対象地域をある程度限定しながらも、地域観察を主体としたエクステンシブ調査が主に行われている。エクステンシブ調査のデメリットを克服するためには、対象地域についての興味や関心を喚起する必要があるため、事前学習を計画的に実施することが必須である。

II 対象地域の確定からシラバス作成まで

原則的に「臨地実習」がエクステンシブ調査で行われるとはいえ、限られた日程（基本的に2泊3日）で多くの専門分野の学生を引率して広域を移動する方法は非現実的である。そこで、著者が「臨地実習」を担当する場合は、空間的に連続する個別地域（都市）、あるいは2つの地域（都市）を比較するという方法をとっている。たとえば、著者が担当した直近の「臨地実習」では、平成10（1998）年度は広島県尾道市および竹原市において「地方中小都市における歴史的景観の保全」、平成12（2000）年度は長崎県高島町と長崎市において「炭鉱で繁栄した島の閉山後の実情、傾斜地に展開する市街地の特徴」をテーマにした。

対象地域の確定に際しては、著者の場合、シラバスに対象地域を明示し、そこに興味や関心を持てる受講生を募る方法をとっている。シラバスに対象地域を掲載しないで、受講希望者が内定してから意見交換を経て対象地域を確定する方法も有効であるが、対象地域そのものに興味や関心をより強く持った学生の参加を促すため、著者は事前に対象地域を示すことにしている。対象地域の候補となるのは、原則的に著者が訪問した経験のある地域である。これは、事前準備を周到に進めることができる点で優れているが、新旧の比較ができるとはいえ担当者自身にとっては新鮮味に欠ける点、受講生の側からすれば自らが希望する地域を主張できない点など、若干の難点もある。

今年度の場合、著者は複数の候補地域とテーマをアンケート形式で調査し、そのなかで人気の高かったものから対象地域を選定した。このアンケート調査は、例年の「臨地実習」で多くの受講生がいる、社会科学科で地理学を専門とする学生を対象に実施した。調査した時期は平成13（2001）年12月の「地理学演習ⅠB」および「地理学演習ⅡB」である。アンケート形式の調査で取り上げた候補地域とテーマをほぼ北から列举すると、次の通りである。

- ① 北海道日高地方の静内と浦河：「軽種馬生産地の現状と行政側の対応」
- ② 東京：「地下鉄銀座線沿線を歩く―東京の市街地の個性を体験する―」
- ③ 飛騨～奥飛騨：「市街地観光と山岳リゾート・温泉地の対比」
- ④ 岡山県南～香川県北：「瀬戸大橋で結合する両地域の対比」

アンケート調査の結果、①が2票、②が4票、③が2票、④が5票であった。票が多い順序に従えば、④を選定すべきではあるが、僅差で2番目に回答を得た②に関する優れた参考図書が刊行されて間もなかったため、対象地域を「東京」に確定した。

年が改まり、シラバス原稿の締切りが近付いたため、対象地域を「東京」とする旨の内容でシラバスを執筆した。上記の参考図書は、正井泰夫監修『昭和30年代懐かしの東京』（2001年、平凡社刊）¹⁾であり、この図書は教科書としてシラバスに掲載した。

III 事前学習会の詳細

1 第1回事前学習会と予備登録

シラバスに示した通り、受講希望学生を集めた第1回事前学習会を4月11日（木）に開いた。日時・場所などの会合の詳細については、シラバスに従って社会科学科の掲示板に貼り出した。第1回事前学習会には、約20名が出席した。この会合に参加しない者には、登録を認めない旨の通知をしていたが、会合開催日が新年度の開講

日であったため、後日にやむを得ず欠席した理由を添えて申し出た者には受講を認めることにした。

第1回事前学習会では、今回の「臨地実習」の狙いと概略を説明した上で、個々の受講希望学生に都合の悪い日程を尋ね、現地実習の日程調整を図る資料とした。8月中旬までは帰省等で都合がつかない学生が多く、9月になると教育実習が実施されるため、8月下旬で調整を図る必要があった。また、受講希望学生が20名前後になると、現地実習での宿舎の確保が大きな課題となる。ビジネスホテルのような個室を希望するか、旅館のような相部屋を希望するか、いずれかを受講希望学生全員に尋ねた。結果は、著者にとっては意外であったが、数名を除いて、大半の者が旅館タイプの相部屋を望んだ。東京都内で旅館型の宿泊施設を探すことはビジネスホテルを探すよりも遥かに難しい。このため、宿泊日（すなわち現地実習の実施日）が限定されることがあり、そのことも勘案して日程調整を図り、結果を電子メールで受講希望学生に連絡することにした。携帯電話の普及も手伝って、受講希望学生は全員がメールアドレスを持っていた。第1回事前学習会の所要時間は約2時間であった。

学生たちから得たメールアドレスは、その後の諸連絡に大きな力を発揮した。携帯電話の表示画面に限りがある場合もあるため、多くの連絡事項がある場合には「臨地実習インフォメーション」を著者の研究室ドアに掲出する旨、簡潔な電子メールで何度か連絡した。反応は非常に素早く、7～8割の者が送信から5分以内に受信したことを連絡してきた。昼休みを待って送信した連絡で掲出を告げた「臨地実習インフォメーション」は、おそらく受講希望学生の過半数が3時限開始までに読んでいたものと思われる。また、学生番号、学生氏名、携帯電話番号とメールアドレスを整理したエクセルファイルは、電子メールの一括送信に使うアドレス帳に活用できただけでなく、学生番号と学生氏名の欄だけを使えば、後に受講登録学生を教務課に連絡する際にも有用であった。さらにこのファイルは、現地実習に際してプリントアウト原稿をフィールドノートに貼り付け、点呼で使う出席簿を兼ねた携帯電話帳として活躍した。

ところで、現地実習での宿泊先の確保については、東京大学本郷キャンパス付近に古い旅館街のあることが分かっていたので、インターネットを活用して調査してみた。そのうちの1軒である鳳明館本館が、2日目の夜のコンパの費用を含めた2泊4食を適切な価格でサービスしてくれたため、ここを宿舎に定め、日程を8月22～24日の2泊3日に設定して、仮人数での予約をおこなった。この日程は、第1回事前学習会で調査した結果によると、一部の学生にとっては必ずしも満足できるものではなかった。そこで、電子メールで「臨地実習インフォメーション」を掲出することと、参加意志の有無をそこに記入することを指示した。同時に「地理学臨地実習」と「地域環境学臨地実習」のいずれに受講登録するのかについても希望を問った。

こうした手続きを経て、5月の連休明けには予備登録を実施するに至った。この時点での予備登録人数は総数で21名、その内訳は「地理学臨地実習」が、8回生1名（男子1名）、3回生5名（女子5名）、2回生10名（男子3名、女子7名）、1回生0名であり、「地域環境学臨地実習」は、4回生1名（女子1名）、3回生4名（女子4名）、2・1回生0名である。東京都心部の徒歩によるフィールドトリップを、引率者1名で実施するには少々負担になる人数であったが、スケジュールを工夫して負担の軽減を図った。

2 第2回事前学習会

第2回事前学習会は、5月29日（水）の午後に設定した。ここでは、集合場所の指示などコースの詳細な説明、京都から東京までの移動方法と費用の説明、教科書『昭和30年代懐かし東京』をベースにした次回の事前学習会での担当地区の調整などをおこなった。所要時間は約2時間30分であった。

まず、集合場所に始まるコースの説明については、表1（レイアウトの都合で学生に配付したものの一部を抜粋）をもとにして説明をおこなった。大半の学生が京都方面から来ることを考えれば、東京駅で集合するのが時間的なロスの少ない方法であろうが、巨大ターミナルでの集合に不安があったため、JR総武線の両国駅西口の改札前付近を集合場所として、8月22日の午前11時に集合時間を設定した。この集合場所については、平成14（2002）年3月中旬に著者があらかじめ下見し、駅を利用する人々の流れを妨げずに20名前後が迷うことなく集合できることを確認しておいた。

集合時間を午前11時に設定したのは、当日の朝7時頃に新幹線で京都駅を発てば到着可能なように配慮したためである。ただ、午前11時に集合してからすぐに昼食というのは効率が悪いので、集合前に昼食を摂っておくように指導した。また、1日目のフィールドトリップの終着点をJR東京駅に設定したため、不要な荷物はあらかじめ東京駅のコインロッカーに入れておくように指示した。

表1 第2回事前学習会で配付した行程表(抜粋)

平成14年度 地理学臨地実習・地域環境学臨地実習 実施要領	
引率・指導：香川貴志 日程：平成14年8月22日(木)～8月24日(土) 集合：JR総武本線「両国(りょうごく)」駅、西口の改札出口付近。 8月22日午前11時(必ず昼食を摂っておくこと。時間厳守) ★不要な荷物は必ず東京駅のコインロッカーに入れておくこと [東京駅から両国駅までの行き方] 東京駅から「山手線内回り」「京浜東北線/浦和・大宮方面」に乗り →2駅目の「秋葉原(あきはばら)」で乗り換え →総武本線の船橋・千葉方面行きに乗り、2駅目の駅が「両国」 宿泊：鳳明館本館・台町別館 113-0033 東京都文京区本郷5-10-5 (地図は後日配付) TEL03-3811-1181 FAX03-3811-1764 営団丸ノ内線「本郷3丁目」駅から徒歩10分 営団南北線「東大前」駅から徒歩10分 都営三田線「春日」駅から徒歩5分 行程(8月22日) 11:00 両国駅西口集合 11:05 江戸東京博物館入館(現代に至るまでの東京の歴史と地理) 12:05 12:10 両国→(都営大江戸線/「蔵前」乗換/都営浅草線)→浅草12:30 12:40 浅草雷門(仲見世・浅草寺など) 浅草雷門13:20 13:30 浅草雷門→(約2km)→上野駅14:10 14:15 上野駅→(約1km)→湯島天神14:40 14:50 湯島天神→(約2km)→秋葉原15:30 15:40 秋葉原→(約2km)→日本橋(東海道起点) 16:20 16:30 日本橋→(約1km)→東京駅16:50 17:00 東京→(営団丸ノ内線)→本郷三丁目17:10 17:15 本郷三丁目→(約0.5km)→宿舍「鳳明館本館・台町別館」17:25 ★風呂と食事の後、1時間程度のミーティング。 ★ミーティング後は自由時間(門限厳守)	行程：(8月23日) 09:00 宿舍「鳳明館本館・台町別館」→(約0.5km)→本郷三丁目19:10 09:15 本郷三丁目→(営団丸ノ内線)→東京9:25 09:30 東京駅→(約1.5km)→銀座10:00 10:05 銀座→(約2km)→虎ノ門(霞ヶ関官庁街・文部科学省) 10:45 10:50 虎ノ門→(約1km)→永田町(首相官邸・国会議事堂) 11:20 11:30 永田町→(約1km)→赤坂見附11:50 【昼食休憩】(赤坂見附付近にはファストフード店・コンビニ多数) (再集合の場所は当日に指示) 13:00 赤坂見附→(約1.5km)→青山一丁目13:30 13:40 青山一丁目→(約1.5km)→表参道14:10 14:15 表参道(同潤会青山アパート、表参道の櫓並木) 表参道14:55 15:00 表参道→(約1.5km)→渋谷15:40 ★渋谷で一時解散(街歩き・買い物など自由行動) ★18:30より宿舍にて夕食(簡単なコンパを含む)を実施。 ★必ず夕食に間に合うように宿舍に戻ることを。 [渋谷から宿舍までの行き方] 遅くとも17:40分には銀座線に乗ること 渋谷駅から営団銀座線に乗り(後ろ寄り、改札に入って右側が良い) →5駅目の「溜池山王(ためいけさんのう)」で乗り換え →営団南北線の赤羽岩淵・浦和美園方面に乗り →5駅目の「後楽園(こうらくえん)」で下車、徒歩10分で宿舍 または6駅目の「東大前(とうだいまえ)」で下車、徒歩10分で宿舍 行程：(8月24日) 09:00 朝食後のミーティング レポート課題の指示 自由行動に関わる質問の受け付け 10:00 宿舍にて解散

1

2

コースの概要を以下に記す。集合後、近世以降の東京の歴史と地理を概観させるため、両国駅前にある江戸東京博物館の見学を設定した。以後の行程を考えて、見学時間は1時間とせざるを得なかった。今回のフィールドトリップは「地下鉄銀座線沿線を歩く」というテーマを設けているため、出発点の浅草までは効率を重視して地下鉄で移動することにした。浅草から東京駅までが1日目の行程で、表1に示したポイント間の距離を1/10,000地形図の図上で測定し、若干の寄り道も考えた少し長めのポイント間距離をベースにして、約1kmを20分でタイムテーブルを作った。実施日から考えて猛暑も予想されるため、こうしたスローペースとなった。各ポイントに設けた若干の時間的余裕は、それぞれの場所での説明、時間調整、トイレ休憩や水分補給のためのものである。1日目の終着点の東京駅でコインロッカーから荷物を出した後は、宿舍の最寄駅である丸ノ内線本郷三丁目駅まで地下鉄で移動して投宿する計画を立てた。

2日目は、1日目の終着点である東京駅まで地下鉄丸ノ内線で移動し、そこから歩き始めることにした。宿舍の出発はラッシュアワーを少しでもはずすため、本郷三丁目駅から9時過ぎの電車にすることにし、銀座の商業地を買物客が集まる時間の前に通過するような計画とした。虎ノ門から赤坂までは、地下鉄銀座線から少しルートが外れるものの、永田町界隈を通過して首相官邸、国会議事堂や国立国会図書館を外部から眺めることにした。昼食場所には多くの飲食店が立地する赤坂を選んだ。赤坂には安い飲食店やファストフード店も多く、旅費を節約したい学生の利便を考慮した。赤坂から渋谷までは地下鉄銀座線(国道246号線＝青山通り)を西進するが、同潤会青山アパートを見るために、表参道を原宿方面に少し往復する経路を設定した。渋谷では、流行に敏感な学生たちを現地説明だけで拘束するのは酷であると考え、ハチ公前でフィールドトリップを打ち切り、2時間程度ではあるが自由時間を設けた。宿舍には午後6時30分からの夕食(兼ミーティングおよびコンパ)までに必ず戻るよう指示した。

3日目は、朝食の後にミーティングを設定、チェックアウトと同時に解散して、後は自由行動とした。東京のように見どころの多い巨大都市では、自由行動にそれなりの価値があること、事前学習にかなりの時間を費やすことなどを考慮した措置である。

さて、京都から東京までの移動方法についての説明では、オーソドックスな新幹線をはじめ、夜行バス「ドリー

ム号」, 名神・東名の両高速道路を昼間に走破する「東海道昼特急大阪号」, 「青春18 きっぷ」を使った場合の所要時間や運賃を説明した。現地集合・解散であるため, 交通機関の選択は受講希望学生それぞれに任せた。

事前学習における教科書の利用は, すでに記した『昭和30年代懐かしの東京』を受講希望学生に購入させていたので, これを持参させ, 地下鉄銀座線の沿線に深く関わる7つの地区(浅草, 上野, 日本橋, 丸ノ内, 銀座, 赤坂, 渋谷)について, 各地区ごとに2~3人のグループを作り, このグループ単位ごとに第3回事前学習会において, 教科書以外の参考資料も駆使したプレゼンテーションをおこなわせることにした。学生の希望が特定地区に偏在した場合は, 当事者の話し合いの下に調整を図った。地形図を参考にする場合は, 国土地理院の1/10,000地形図「上野」「日本橋」「新橋」「新宿」「渋谷」(以上, コード番号順)でルート全体がカバーされることを教示した。6月下旬に開催予定の第3回事前学習会は, 電子メールや「臨地実習インフォメーション」を活用して連絡することにした。

3 第3回事前学習会と受講登録

第3回事前学習会は, 6月25日(水)に実施した。当初は午後1時からを予定していたが, 臨時教授会などの業務が著者に2件入ったため, 電子メールの一括送信を活用して受講希望学生に対し, 午後4時に開始時刻を変更する旨の連絡をした。開始時刻の繰下げにともなって, 家庭教師などのアルバイトの関係で早退を余儀なくされる学生については, プレゼンテーションの順序を繰り上げるなどの措置をとった。所要時間は, 約2時間30分であった。

学生たちには, プレゼンテーションに際して, プリントを配付するように指示しておいた。教科書の『昭和30年代懐かしの東京』の評判はすこぶる良く, 一部の学生から「必要であるからプレゼンテーションをした」かのような雰囲気を感じられたものの, 大半の学生たちからはフィールドに対する興味や関心が確実に高まっている様子を看取できた。それぞれのプレゼンテーションについては, 質疑応答や若干のコメントをおこなった。気になる点としては, 教科書以外の参考資料の活用が低調で, インターネットによる検索の範囲を超えるものは殆どなかった。インターネットの普及にともなって, 学生たちの情報検索が安易に, また「狭く深く」なる傾向は, 決して喜ばしいことではないように思える。

このように第3回事前学習会はゼミナール形式で進行した。全ての地区についてのプレゼンテーションが終わった後, 当日までの事前学習会はもう実施しないこと, 様々な連絡には電子メールや「臨地実習インフォメーション」を活用することを指示して解散した。

7月には, 教務課からの問い合わせに応じて, 受講登録者の一覧を「地理学臨地実習」と「地域環境学臨地実習」のそれぞれについて届け出た。ここでも先に記したエクセルファイルの一部が有効であった。最終的な登録者は, 第2回事前学習会の後に「地理学臨地実習」で登録を予定していた2回生女子1名がキャンセルしたため, 総数で20名となった。その内訳は「地理学臨地実習」が, 8回生1名(男子1名), 3回生5名(女子5名), 2回生9名(男子3名, 女子6名), 1回生0名であり, 「地域環境学臨地実習」は, 4回生1名(女子1名), 3回生4名(女子4名), 2・1回生0名である。

IV 現地実習の実施

1 現地実習1日目: 江戸東京博物館, 浅草~上野~湯島天神~秋葉原~日本橋~東京駅

前日の午後から夕刻にかけて関東地方の一部で降った雨もあがり, 8月22日の集合時間には, 東京下町の両国には青空が広がっていた。気圧配置と前日の雨が幸いしたのか, 集合時間に日陰にいると爽やかな涼風が吹く好天であった。数分の遅刻者が出たが, 第3回事前学習会の後に「地理学臨地実習」をキャンセルした2回生女子1名を除いた全員が, JR両国駅前に11時5分に揃った。ここからの第1日目の移動ルートは, 図1に示す通りである。

点呼ののち, 駅前で通行する人びとの障害になってはいけなないので, すぐに江戸東京博物館の入場券売り場前の日陰に移動した。ここでフィールドノートを学生たち全員に配布し, その使い方を教示した。続けて, 両国の簡単な説明をおこなった。その内容は, 両国駅が千葉方面への中長距離列車のターミナルであったこと(上野, 新宿なども同様であることを合わせて説明), 大きな駅舎の一部がピアホールなどに再利用されていること, 目の

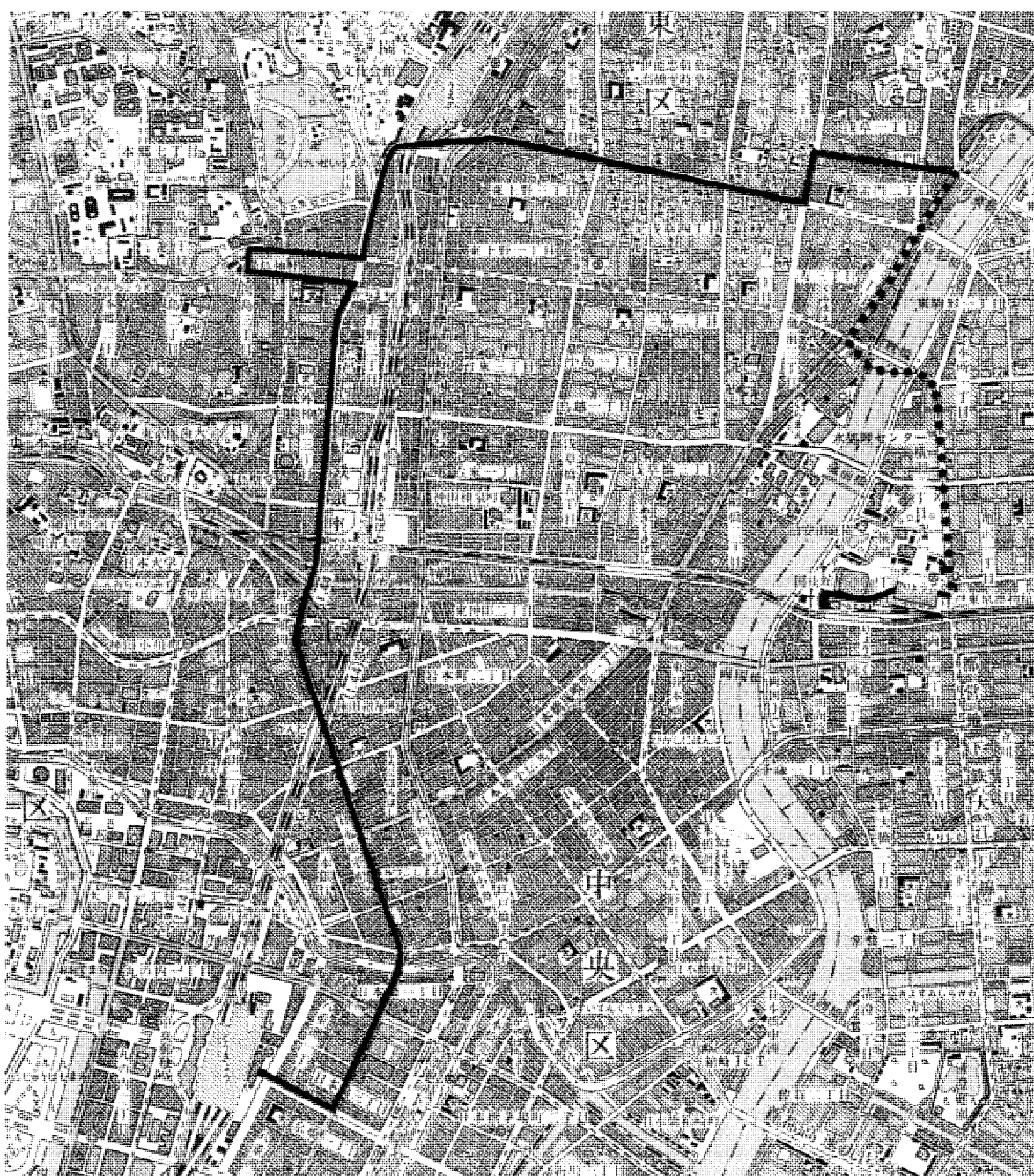


図1 現地実習の第1日目におけるフィールドトリップのコース

注) 太丸点線は、地下鉄（都営大江戸線，都営浅草線）での移動経路を示す。

国土地理院 1/25,000地形図「東京首都」（平成13年3月1日発行）を使用（原寸大）

前にある国技館が蔵前から移転されてきたこと、江戸東京博物館の見どころなどである。説明を終え、再度1時間後に現在地に集合することを告げて、学生たちを江戸東京博物館に入館させ、館内では自由行動とした。著者も入館して、必要に応じて学生たちに補足説明をした。

再集合ののち、JR両国駅とは反対の都営大江戸線の両国駅に向かった。再集合した際に、2000年12月に全線開通した大江戸線は、地中深くを走るためシールド工法という掘削機による建設で造られたこと、多くの駅に災害時の救援物資の蓄積スペースが設けられていること、建設費の節約ゆえにトンネル断面が小さいため、車内広告の掲出方法で小規模な車輛断面が分かることなどを説明した。

また、以後の地下鉄での移動を円滑に進めるため、大江戸線に乗車する際に、東京の地下鉄・私鉄の共通カー

ド「パスネット」を購入するように指示した。両国駅からは大江戸線で蔵前駅まで行き、ここで都営浅草線に乗り換え浅草駅に至った。浅草駅に到着後は、雷門前の観光案内所前で、雷門、仲見世や浅草寺などの簡単な説明を施し、40分後に再集合することにして一時解散した。観光客が多く見どころが集積しているような場所では、経験からして簡単な説明の後に自由行動時間を設ける方が効率的なフィールドトリップができる。

いよいよ浅草から渋谷に向けて歩き始めることになった。道中では沿道の様子を良く観察しておくように指示した。雷門前を出発したのは13時50分で、予定よりも20分遅れている。最初は、地下鉄銀座線ルートから少し外れるが雷門通りを西進した。通りの両側に小売店や飲食店が並ぶ様子を、後に歩く浅草通りの同業者町と対比させるためである。雷門1丁目交差点を左折ののち南進、寿4丁目交差点（浅草郵便局前）を右折して浅草通りを上野方面に向かった。陽射しが強い場合は、東西方向の街路では道路の南サイド、南北方向の街路では道路の西サイド（午前ならば東サイド）を歩くことにして、体力の消耗を最小限にする工夫をした。

浅草通りでは、ほぼ上野駅の直近まで仏壇・仏具店が多数並んだ独特の景観が観察できる。上野駅前に着いたのは14時15分、余裕のある計画を立てていたのので、当初の予定からは5分遅れにまで回復していた。上野駅前では駅前歩道橋に上り、首都高速1号線の下の日陰を利用して、ここまでの簡単な説明をした。説明内容は、雷門通りと浅草通りの商業地において店舗構成の違いがみられること、浅草通りに仏壇・仏具店が多数立地するのは、秋葉原の電気街と同様に「集積の利益」を目指した同業者町を形成しているためであることなどである。また、上野駅が東北・上信越方面のターミナルとして機能してきたことや、平成14（2002）年に上野駅が改装されたことも説明した。

上野駅からは、中央通りを南下し上野広小路駅のある松坂屋前の交差点を右折して、春日通りを西進して湯島天神に至った。不忍通りとの交差点あたりから勾配が顕著となり、学生たちは東京の地形が変化に富んでいることを体験できたはずである。ほどなく湯島天神に到着、春日通りに面した夫婦坂から境内に入る。時刻は14時35分で、当初の予定からは5分の余裕が生じていた。湯島天神の境内で、ここが洪積台地の末端にあたり、ここまで歩いてきた沖積平野との比高が神社から東方向をみた景観（とりわけ男坂の様子）で実体験できること、さらに台地の末端面は急傾斜であるため緑地が帯状に残り易いこと、同様の緑地が東京の市街地の各所に残存していることなどを説明した。当初の予想よりも速く歩けることが分かってきたので、湯島天神の出発時刻は14時55分に繰り下げ、若干の休憩時間も確保した。

湯島天神で学生たちの体力は大幅に回復したようであった。男坂を下ってから中央通りに戻り、第1日目の終着点まではほぼ地下鉄銀座線をトレースしながら歩くことになる。中間の時刻チェックポイントは秋葉原になっているが、ここは人込みが予想されるため、秋葉原の説明は中央通りが神田川をオーバークロスする万世橋でおこなうことにした。秋葉原の電気街は銀座線末広町駅の近くまで広がっているのので、学生たちは一様に電気街の巨大さに驚いている。ハードだけでなくソフトを販売する店舗の周辺には、明らかな「オタク」の姿も多く見られ、電気街で多く見かけることのできた外国人客とともに、貴重な説明ネタとなった。万世橋での説明は、「集積の利益」を求めた同業者町の典型としての秋葉原の個性、同じ電気街としても京都の寺町とは広さも密度も大きな違いがあることなどに費やした。

万世橋を出発すると、神田川よりも南側の地域の様子はオフィスビルが徐々に増えてくる。ビジネスマンを中心とした人通りも多く、小休止しての説明は困難であるため、次の説明ポイントを三越本店前にした。三越本店から日本橋まではわずかな距離ではあるが、15分のトイレ休憩で三越本店を利用させてもらった。巨大で豪壮な吹き抜けは、ここが本店であることを十二分に感じさせてくれた。

三越本店から日本橋までは2分程度の距離である。日本橋では国道原点の複製銘板の前でその説明をした。京都までの距離も記されており、学生たちの多くがカメラで写真を撮っていた。この時点での時刻は16時10分、当初の予定よりも20分早くなっており、余裕をもって投宿できそうで一安心した。

日本橋から東京駅までは、銀行や証券会社などのオフィスが林立する業務街を歩くことになる。何度かの信号待ちの間に、神田寄りでは地方銀行の東京支店が多く、南西に進むにつれて都市銀行の支店が増えてくる様子を、地価との関係で説明した。八重洲通りに入ってすぐに地下街へ降りることにしたが、その前に各自が荷物を入れているコインロッカーの場所が異なっているので、再集合の場所を丸ノ内地下コンコースの「動輪の広場」に指定し、地下街で一時解散した。再集合ののち地下鉄丸ノ内線で東京駅を発ったのが16時45分ころであったので、夕刻の混雑時間前に地下鉄の乗車できたのは幸いであった。本郷三丁目駅で下車ののち、宿舎までの経路を少し

誤ったが、東京大学の赤門の前を経由して、宿舎には17時20分頃に到着した。

宿舎に到着後、部屋割りを済ませてから、夕食を18時30分からにすることを連絡し、荷解きや風呂の時間を1時間程度確保した。夕食は1時間弱で終わったので19時30分から21時前までミーティングを実施した。その内容は、第1日目のフィールドトリップで印象に残った点を1名ずつ話してもらい、それに対して担当者（著者）からコメントするというものである。類似した感想をまとめてルート順に整理すると、江戸東京博物館のディスプレイの素晴らしさ、浅草や上野に中高年の人々が多いこと、浅草通りの仏壇・仏具店に関する「集積の利益」の説明、湯島天神で見られた東京の地形の面白さ、秋葉原の電気街の異様な賑わい、三越本店の豪壮な雰囲気、日本橋の国道原点、業務街における銀行店舗の特徴の推移などが得られた。

2 現地実習2日目：東京駅～銀座～新橋～虎ノ門～永田町～赤坂見附～青山一丁目～表参道～渋谷

第1日目の適度な疲労があったためか、学生たちの多くは睡眠を十分にとれたようで、第2日目の朝食時間の7時30分には全員が集まった。朝食の後、第2日目の行程（図2・図3）を簡単に説明し、予定通り午前9時に宿舎を出発することを告げた。宿舎を予定時刻に出発したが、小雨が降り出したため前途が少し心配になった。本郷三丁目駅から地下鉄に乗り込んだのは9時10分頃であったため、相当な混雑はなく東京駅まで移動できた。東京駅では八重洲地下街から八重洲口会館のところで地上に出て、大丸が入居した東京駅ビルが建て替えを検討中であるとの説明をした。対する丸の内口では、新しい「丸ビル」が平成14（2002）年9月6日のオープンに向けて仕上げを急いでおり、八重洲口もその顔である駅ビルのリニューアルが要請されるのであろう。

八重洲通りを東南東に進み、中央通りとの交差点を右折して、いよいよ銀座に続く都心商業地へ進む。しかし、京橋駅の南西側で首都高速をくぐるまでは、業務街としての色彩が濃い地域である。銀座二丁目あたりから中心商業地らしい景観が見られるようになる。銀座四丁目交差点には9時50分頃に到着したため、幸いにも交差点付近の舗道上で簡単な説明をすることができた。そこが東京有数の高地価地点であること、銀座の象徴として親しまれている和光百貨店の時計塔が見えること、立ち並ぶ多くの店舗は高級ブランドであり、顧客の年齢層も高めであることなどの説明である。

ほぼ予定時刻通りに銀座を通過できたが、新橋に向かう途中で一時上がっていた雨が再び降り出した。猛暑の中を歩くよりは楽であるが、雨はフィールドトリップでは歓迎されない天候である。ビニール傘の購入やトイレ休憩のため、新橋一丁目交差点で小休止ののち、10時15分に新橋駅のJR線ガードをくぐった。外堀通りを虎ノ門方向に進み、予定より15分早く10時30分に文部科学省前に着いた。ここで、霞ヶ関の官庁街についての簡単な説明をしたのち、ここから赤坂までは地下鉄銀座線の沿線から少しだけ外れることを告げた。修学旅行的にはなるが、ここまで来て日本の行政・立法の中心を見逃すわけにはいかなかった。特許庁前の信号を右折し、特許庁の西側にある付近の地図を利用して霞ヶ関官庁街の説明をした。その後、内閣府や首相官邸方面に向かって坂を上がる。学生たちは、第1日目の湯島天神付近で感じた東京の地形の複雑さを、この場所でも体験することができた。

国会議事堂の内部見学は割愛して、国会裏を国立国会図書館に向かって歩き、自民党本部方面へ左折した。交差点を左折する際、少し先に最高裁判所や国立劇場があること、国会図書館では館内入場者数に制限があることなど、周辺施設にかかわる簡単な説明をした。自民党本部はテレビで見る機会が多いものの実物を見る機会は少ないためか、国会議事堂と同様に学生たちの印象に残ったようである。国道246号線（青山通り）に出てからは、赤坂プリンスホテル付近で赤坂見附や弁慶堀の説明をして、赤坂見附交差点には11時10分に到着した。当初の予定よりは40分ほど余裕ができていたが、昼食時の飲食店の混雑を避けるため、正午に赤坂見附交差点の交番前に集まるよう指示を出して昼食解散した。

時間通りに再集合ののち、天候が大崩れしないうちに渋谷まで行きたいので、漫然と歩かないように注意して、赤坂見附交差点を12時5分に出発した（以下の行程については図3を参照）。昼食休憩でかえって疲れが出たのか、あるいは歩くことに飽きてきたのか、学生たちの列が前後にバラけるようになってきた。信号を一度に渡るのは困難で、その度に列の前グループは後グループが交差点を通過するのを待たなければならなかった。しかし、小雨が降る中、こうした小休止は適度な休憩時間となった。小休止の時間を活用して、赤坂御用地、本田技研工業本社や神宮外苑などの説明を適宜おこなった。まとまった休憩時間をとらなかったことも幸いし、表参道交差点を右折して同潤会青山アパート前に着いたのは12時50分であった。1927年に最終完成した同潤会青山アパートについて、同潤会の設立経緯、アパートの払い下げ、さらに解体が計画されていることなどを説明した。また、

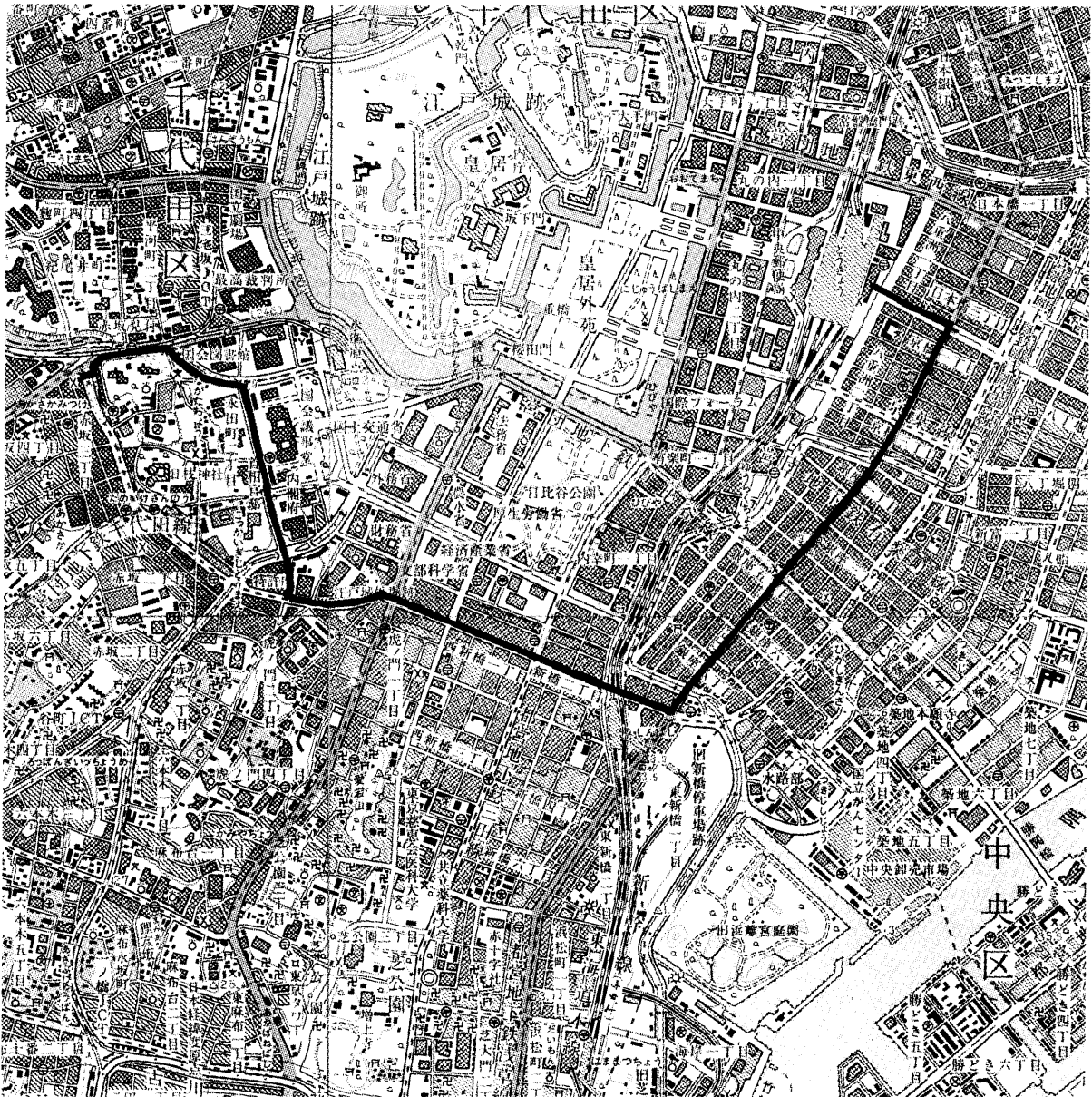


図2 現地実習の第2日目におけるフィールドトリップのコース（その1）

国土地理院 1/25,000地形図「東京首都」（平成13年3月1日発行），
 国土地理院 1/25,000地形図「東京南部」（平成13年10月1日発行），
 国土地理院 1/25,000地形図「東京西部」（平成14年9月1日発行），
 国土地理院 1/25,000地形図「東京西南部」（平成12年8月1日発行），以上4点を原寸大で使用。

表参道がファッションストリートに変貌している状況，ベビーカーで乳児を連れた外国人歩行者が多いのは観光客ではなく周辺居住者と考えられることなども解説した。アパートの写真撮影を希望した学生たちが多かったため，13時15分に再度集合することにして一時解散した。

再集合ののち，表参道交差点に戻り，ここから国道246号線を渋谷方面に向かった。沿道では，スーパーマーケットの先駆けである「紀ノ国屋」，国連大学，青山学院大学などを簡単に説明し，宮益坂を下って渋谷駅に至った。渋谷が文字どおり「谷」であることは，我われが辿ってきた地下鉄銀座線が終点の渋谷駅で高架になることで容易に説明できる。渋谷駅東口の交差点では，タイミング良く銀座線の電車が見られた。JR山手線をくぐって西口のハチ公前に着いたのは13時45分で，予定よりも2時間ほど早く到着した。学生たちに人気のある渋谷で自由時間を長く設定できたことは，天候が優れないことを考えると良かったのかもしれないが，好天であれ

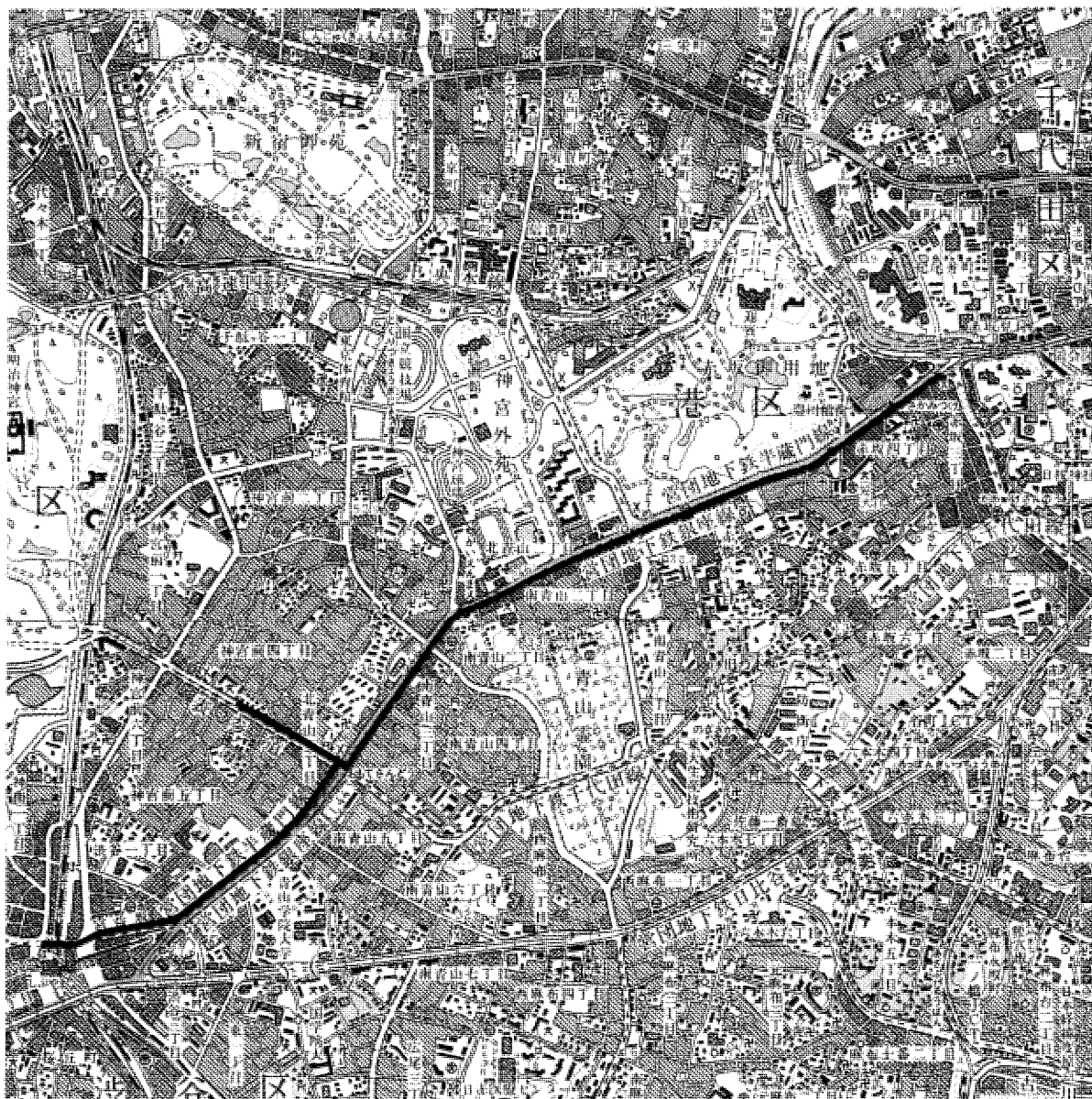


図3 現地実習の第2日目におけるフィールドトリップのコース（その2）

国土地理院 1/25,000地形図「東京西部」（平成14年9月1日発行），
国土地理院 1/25,000地形図「東京西南部」（平成12年8月1日発行），以上2点を原寸大で使用。

ばNHK放送センターあたりまでフィールドトリップを追加続行することが可能であろうと思われる。自由行動のための一時解散に先立っては、この日の夜のミーティングで各自が自由時間をどのように過ごしたのかを報告するとの約束をし、夕食時間が18時45分（当初の予定から15分繰り下げ）であるため、余裕をもって遅くとも17時40分の銀座線で宿舎に向かって戻るようにとの指示を出した。

夕食（兼ミーティングおよびコンパ）における各自からの報告では、ほぼ半数の者が買物などの渋谷探索を楽しんだようであるが、新宿まで移動して都庁の展望台に登った者、芝公園まで行って東京タワーに登った者もあり、あり余る行動力に感心させられた。「臨地実習」そのものに関するコメントでは、従来は「点」で認識していた東京の地名（地区）が、それらを結ぶルートを歩いたことによって、「線上の点」として認識できるようになったという主旨の感想が少なからずみられた。「地下鉄銀座線沿線を歩く」という一見突飛な企画は、首都東京の主要部の構造を理解させるという意味では、そこそこの成功をおさめたといえよう。

3 現地実習3日目：宿舎でのミーティング、自由行動のための質問受け

最終日は、見どころの多い東京を各自の希望に基づいて行動させることの意義を考えて、朝食後のミーティングの後は自由行動とした。朝食は8時からとして、ほぼ全員が食事を終えたのを見計らって、そのままミーティングとした。その際、帰洛後は8月末日までに「臨地実習」のレポート（A4で1枚程度）を、著者の教官研究室のポストに届けるか、あるいは電子メールで送信するように指示し、現地実習での全体行動を9時30分頃に解散した。その後は、東京での自由行動に関わる質問を受け付けたが、かなりの学生たちが日中は東京周辺に残留していたようである。後日、レポートを読んだり受講学生から話しを聞いたりすると、横浜や鎌倉に行った者、夜行バス「ドリーム号」で帰洛した者、延泊して東京巡りを楽しんだ者など、「臨地実習」という機会を活用して多彩な地域観察が続行されていた。

V まとめ—事後レポートからみた「臨地実習」—

提出されたレポートは18通、うち電子メールでの提出は9通あり、提出者の半数が情報化時代らしい提出方法をとった。まだ夏季休暇中であつたため、帰省先から送信した者も多かったと考えられる。しかし、携帯電話から数回に分けて送信してくる者も数名おり、それらの処理には苦勞した。パソコンを活用して1通にまとめるように指示を出しておくべきであつたと反省している。また、締切り日を過ぎてもレポートを提出しない者が2名いた。これらの2名は現地での実習中は熱心であつたが、レポートを提出しなかったため最良ランクの成績を与えるわけにはいかなかった。

レポートに記された内容は書き手の個性を反映して多彩であつた。これらを分解して、4つのグループに整理し直してみた。各グループは本稿著者の恣意的なものであるため、別グループに入れた方が適切なケースもあるうが、理解の手助けになることを考えて敢えて設定したものである。これら4つのグループは「都市構造」「各地域の特色」「関西との相違」「感想」である。以下では、各グループごとにレポートに記された個々の内容を多い順に並べ、主なものについて若干の考察を加える。

都市構造に関わる内容では、「下町・商業地域・ビジネス街・官庁街などのメリハリのある雰囲気の違い」を指摘した者が8名いた。これは東京の機能分化を適切に捉えた良い視点であると評価できる。これに次いで多くの者が記したのは「電柱地中化による広く美しい歩道」で6名を数えた。広い歩道は、銀座や表参道の印象が強かつたのであろうが、近現代に花開いた東京の都市計画が歴史的都市である京都のそれとは違っていることを理解できている点で、地域比較の面白さを喚起できたのではないかと思う。「坂道の多さ、地形と地名との対応関係」は5名、「湯島天神付近の台地と平野との地形的コントラスト」は4名が記していた。これらは東京の地形の複雑さに関わる内容を共通項として有しているが、周辺に山はあっても中心市街地内に起伏が少ない京都に慣れた者にとっては新鮮な驚きであつたのかもしれない。観光ガイドマップで目当ての店舗を探しながら歩いていたのでは、おそらく起伏の多彩さに気付くことは稀なのではなかろうか。「東京の街路パターンの複雑さ」「百尺規制による美しいビル街」あるいは「都市銀行と地方銀行の立地場所の違い」に触れた者はそれぞれ2名いた。街路パターンは実際に歩いてみて感じたことであろうし、百尺規制については大阪の御堂筋にも同様の事例があることを解説したことが印象に残つたのかもしれない。都市銀行と地方銀行の立地場所の違いは、解説を施そうと思つている矢先に学生が気付いて著者に指摘してきた事柄で、まだ地理学を専攻していない2回生の観察眼の鋭さに驚かされた。「ビル街に溶け込むような寺社」「昼時のビジネス街に多い弁当屋」は各1名から得られた。後者は、オフィス集積のわりには飲食店が少ない状況が間接的に説明できる好事例である。

各地域の特色に関わる内容では、「仏具店・電気街にみられる集積の利益」に関する記述が12名から得られた。これは現地で丁寧な説明を試みたことの影響もあるうが、予想を凌ぐ規模に圧倒された者が多かったのではなかろうか。この規模の大きさこそが東京の巨大な経済集積に他ならない。次に多い7名から記述されたのが「浅草には関西のような庶民的な雰囲気がある」という内容である。浅草では自由行動の時間も確保したため、仲見世や商店街の気取らない雰囲気に「関西」を感じた者が多かったと考えられる。ところで、路上での実習中のものではないが「江戸東京博物館の展示の素晴らしさ」を讃えた者が4名いた。この博物館は、路上での実習に先駆けて東京の概観をさせるためにコースに組み込んだものであつたが、展示内容に踏み込んだレポート記述を参考にすると、地形や地名等の地理的要素よりも江戸・東京の文化に関心を寄せた者が多かったことを知れる。再び路上での実習に関するレポートに戻ると、3名からの記述を得たものは「各繁華街の雰囲気が相互に全く異なっ

ている」「秋葉原電気街にたむろするオタク」「同潤会青山アパートの立地場所と独特の雰囲気」「人が溢れた渋谷の活気」の4種であった。同潤会青山アパートに関するもの以外は、全て東京の経済集積を反映した機能集積や機能分化から比較的簡単に説明できる。しかし、同潤会青山アパートについては、東京の市街地の成長過程や関東大震災からの復興なども説明に加える必要があり、現地での解説にも多少の時間を要した。解体が間近であるという説明をしたことも、同潤会青山アパートの印象を強くするのに寄与した可能性がある。その他では「国道原点に感動した」という内容の記述が2名から、「チップ式トイレ」「断面の小さな大江戸線の地下鉄車輛」「防災拠点兼ねた地下鉄駅の構造」がそれぞれ1名から得られた。

関西との違いに関する記述では、「エスカレーターでは歩かない人が左側に立つ習慣」「鉄道のバリアフリー化が関西よりも遅れている」がそれぞれ2名からあった。エスカレーターの習慣については新聞などでも取り上げられたことがあるが、グローバルスタンダードは歩かない人が右側に立つ関西式のように、東京式と関西式のどちらが正しいという問題ではないようである。最近の関西（特に新幹線コンコースとホームとの間のエスカレーター）では両者が混在していて、こうした混乱がむしろ問題ではなからうか。バリアフリー化の遅れについては、東京の都市基盤の整備がいち早く行われたことが、現在になって逆に欠点になっている好事例である。また「浅草の人力車の車夫は嵐山のそれよりも迫力がない」「表参道では輸入車が溢れている」「ブティックの洋服の色が関西よりも地味」という記述がそれぞれ1名から得られた。このように関西との違いに関する記述では、日常生活に密着したミクロな視点のものが多くみられる。このことは、地域間の違いを見い出そうとした場合、日本国内であれば視点がミクロになりがちであることを示していると同時に、大きな視点での地域比較には相当な経験が求められることも示唆している。今後の臨地実習では、地域比較を行う際に相応のサポートが必要であることも分かる。

最後に、参加学生からの感想について列挙する。過半数に及ぶ10名から「フィールドワークの楽しさを実感できた」との回答が得られたことは、今回の企画がかなりの成果を上げたことと自己評価してもよからう。著者にとって印象深かった点は「点で認識していた東京の地名が線でつながった」「自分なりに東京の地図を描けるようになった」という記述が、フィールドワークの楽しさとともに複数の者によって併記されていたことである。これらは公共交通機関を利用した移動では得られない効果である。その他では「面白い魅力的な都市、再訪したい」が5名、「巨大な経済集積からくる圧倒的な迫力」が3名、「宿（鳳明館本館）のノスタルジックな雰囲気」が2名から得られた。単数（1名）からの感想では「遊びに行くのには良いが落ちつかなさそう」「電車に乗らなくても意外と歩ける（＝東京は意外に小さい）」「観光地以外の場所を巡る面白さを実感」「裏道に一步入ると急変する雰囲気」「東京の人びとは交通マナーが良い」「一度でいいから住んでみたい」「東京言葉は東京で聞くと味がある」「銀座線沿線を踏破したという満足感」がある。特に最後に挙げた「踏破の満足感」については、2日目に小雨が降り出した際に地下鉄利用を考えたことを思い出し、つくづく「乗らなくて良かった」と思わせる感想であった。

以上のように本稿では、平成14(2002)年度「地理学臨地実習」「地域環境学臨時地実習」の準備、事前学習、現地実習、そしてレポートについての事実記載と若干の考察をおこなった。参加学生からのレポート内容を検討すれば、仮に同様のコースで現地実習を実施する際の解説のヒントが見えて来ようし、現地での移動時間はコースのプランニングの参考にすることができよう。なお、今回の実習を終えて以降、東京の地域観察に絶好な書籍（全国地理教育研究会監修・東京都地理教育研究会編著・東京私立中学高等学校地理教育研究会編著『地図で歩く東京Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』）²⁾³⁾⁴⁾が刊行された。このうちⅠとⅡは、区部の東部・西部を扱っている。分野を問わず、東京での地域観察を企画する場合には指導者が目を通しておくことが必要であろう。

文献

- 1) 正井泰夫監修（2001）『昭和30年代 懐かしの東京』平凡社．96p.
- 2) 全国地理教育研究会監修・東京都地理教育研究会編著・東京私立中学高等学校地理教育研究会編著（2002）『地図で歩く東京Ⅰ 東京都区部東』古今書院．111p.
- 3) 全国地理教育研究会監修・東京都地理教育研究会編著・東京私立中学高等学校地理教育研究会編著（2002）『地図で歩く東京Ⅱ 東京都区部西』古今書院．103p.
- 4) 全国地理教育研究会監修・東京都地理教育研究会編著・東京私立中学高等学校地理教育研究会編著（2002）『地図で歩く東京Ⅲ 多摩・島嶼』古今書院．103p.